

高雄日本人学校（中学部）における現地中学校との交流を通じた国際理解

前高雄日本人学校 教諭

長崎県長崎市立桜馬場中学校 教諭 安城 学

キーワード：異文化理解，現地学校との交流会とその方法，教員が求められるもの

1. はじめに

様々なご配慮によって、在外教育施設で生徒達と一緒に学ぶ機会を頂いた。私が勤務した高雄日本人学校がある台湾の中でも、特に高雄がある台湾南部は大変親日的な地域である。日本の東日本大震災の際には台湾から募金が百数十億円集まり、その額は他の地域や国々と比較しても突出していた。台湾の人々はご年配から小中高生に至るまで、日本に寄せる関心や好意は総じて高い。日本語を話す方々は珍しくなく、町で日本語で気軽に話しかけられることも少なくない。様々なご厚意などにこちら日本人が恐縮してしまうことが日常生活でも多々ある。

高雄日本人学校は台湾の方々との絆を永年にわたり大切に、現地の方々との交流を教育活動の柱のひとつとして捉えている。親日的な地域の多くの方々のおかげで、高雄日本人学校の教育活動が支えられていること、それがいかに大切であるか、私も在台的3年間で何度も認識した。

2. 高雄日本人学校の現地理解教育

(1) 他民族社会の一面を持つ台湾の社会

台湾は歴史的背景から、中国大陸から移住してきた漢民族が多数を、占め主に平野部を居住地域としてきた。一方で、山間部には漢民族の移住前から住んでいる少数民族も複数おられ、台湾ではそれらの方々を「原住民」（人口の約2%）と呼んでいる。最近では観光や伝統芸能の伝承に携わる方々が多いが、以前までは狩猟を主とした自給自足の生活を営み、民族ごとに伝統や文化、生活スタイルを大切にしてきた。なお、原住民の方々のルーツが、フィリピンなどの南方にあるとの学説もある。

現地学校との交流会は、漢民族の生徒が多い中学校に加え、原住民の生徒が多い中学校との交流会も実施している。本実践記録では後者について記したい。

(2) 現地理解教育の柱としての現地学校との交流会について

①高雄日本人学校における和太鼓の演奏

高雄日本人学校では、日本の伝統芸能を学ぶひとつの柱として、小学生から中学生までが和太鼓に取り組んでいる。小学部、中学部ともに現地学校との交流会などでその演奏を披露する。和太鼓は1演目が約5分程度で合計3演目。1演目は十数人で演奏する。迫力あるリズムカルな演奏で、児童生徒たちは和太鼓の練習に一生懸命取り組み、そして演奏する機会を楽しみにしている。

現地学校との交流会などでの演奏披露の場では、現地学校生徒がその演奏に驚嘆するほどのレベルの演奏に達することもあり、日本の伝統芸能の紹介の観点からはその効果が高い。児童生徒たちは和太鼓の演奏を通じて自分達の良い意味でのアイデンティティを感じることができ、自分たちの頑張りや誇りをもち、さらには日本の伝統芸能について理解を高められる機会となっている。

②台湾の現地学校の特徴

台湾で暮らす十数の少数民族のひとつである「布農（ブヌン）族」（人口約49,000人）の方々が多く暮らす山間部の地域（高雄日本人学校から車で約3時間）に、以前から高雄日本人学校と交流がある「桃源（とうげん）国中」がある。特色ある伝統芸能を生徒達は伝承しており、その中で「布農（ブヌン）族」の伝統的な歌と踊りは、台湾での高い評価を得ている。同校とはほぼ隔年で、高雄日本人学校の中学部の生徒全員が交流をしている。

③交流会の実践の工夫

各地の在外教育施設は現地学校と交流している学校が多いと聞いている。高雄日本人学校も前述の通り現地学校との交流を貴重な機会と捉えているが、単にその交流の日だけのイベント的な範疇にとどまらずに、限られた時間の中で生徒達が深く異文化を理解できるように、その交流の方法や進め方、事前の準備、生徒達の意識付けなどについて管理職と教員が検討を重ねている。

ひとくちに日本の伝統芸能といっても、剣玉（けんだま）や羽根突き、折り紙などについては、中学生にとっては日頃は遊ぶ機会がやや少なく、どちらかといえば馴染みが薄いものである。それらの継承や紹介は日本の中学生にとって大切ではあるが、交流会で唐突に取り上げることでは深いレベルの国際交流はやや求めにくい。

そこで、教育効果を高めるために様々な視点から検討した結果、以下を交流会の大きな柱とした。

A. 両校が日頃から取り組んでいる伝統芸能に重点を置いて交流する。

高雄日本人学校の和太鼓の演奏、桃源国中のブヌン族の歌と踊りを交流会のメインとする。

B. 太鼓演奏の披露にとどまらず、両校がお互いに太鼓演奏を教えあう。

両校が2～3人ずつのグループを編成。前半約1時間は高雄日本人学校の生徒が桃源国中の生徒に和太鼓を教える。

昼食をはさんで後半約1時間は逆に、桃源国中の生徒が高雄日本人学校の生徒にブヌン族の歌と踊りを教える。

C. 交流会の最後において、両校混成で双方の太鼓を演奏する。

D. 高雄日本人学校の生徒は和太鼓の歴史について事前学習し、交流会でわかりやすく説明する。

④交流会で生徒の教育活動に効果があったこと。

A. 和太鼓の演奏、桃源国中のブヌン族の歌と踊り、ともに日頃から双方の生徒が取り組んでいる活動であり、それを交流会のメインにすることで自然な交流ができた。

B. 日本と台湾の伝統文化を、生徒たち自身が実際に目で見て、耳で聞いて、そして演奏したり躍ったりする経験ができ、臨場感のある異文化理解ができた。

C. 高雄日本人学校の生徒は、総合的な学習の時間で週1時間中国語を学習している。和太鼓や歌踊りをお互いが教え合う場において、積極的に中国語を介してコミュニケーションを取ろうとした。その意味でも、中国語の貴重な実践の機会となった。

また、中国語が苦手であっても、お互いに身振り手振りも交えて教え合っている活動の姿こそが異文化交流の場であり、コミュニケーション能力を高めることにもなった。

D. 最後に両校混成で和太鼓とブヌン族の歌と踊りを披露することで、生徒達が達成感や一体感が得られた。



和太鼓の演奏を教えている場面



交流会最後の両校混成での和太鼓演奏

なお、高雄日本人学校の生徒が交流相手学校の生徒に和太鼓を教えるといった交流は、桃源国中以外の学校との現地学校との交流でも実践している。

3. 異文化理解の教育実践を通じて、教員が求められること

交流会などを通じて生徒達が異文化への理解を深める実践とするには、生徒達の発達段階、個性や適性、そして現地学校の特色などを総合的に考慮した十分な検討が必要であると感じた。

またそれ以上に、私達教員自身の異文化理解にする考え方や日頃からの取り組み、そして日本の伝統文化への理解が求められることを認識した。

4. 在外教育施設での教育実践の今後の課題

私は、大学卒業後の十数年にわたる民間企業勤務を経て教員に転じた。当時は東南アジア地域の支店に約4年間駐在する機会があり、公用私用あわせて計約30ヶ国を訪問、その国々の文化、伝統、習慣、経済政治情勢、人々の考え方や日本との関係など、私なりに学び、吸収したつもりであった。しかし、やはり私の民間企業の名刺の肩書き、すなわち仕事が当地での人間関係の土台であったため、現地の方々との自然な信頼関係を築けたかについては、いささか疑問である。仕事を円滑に進めるための、上辺だけの人間関係にとどまっていたことが多かったと反省の念を持っていた。

おかげさまで高雄日本人学校での3年間においては、教育活動をベースとして当地の方々との自然な人間関係の上に貴重な教育実践をさせていただいたと感謝している。今後の私の課題は、日本の中学校での教育活動においてこそ、生徒達に海外のことに少しずつ興味関心を持つ、視野を広げる、そして日本の良さや役割に気づいていける、そのような指導につなげていくことだ。

国際理解への教育は在外教育施設だけでなく、日本でこそ求められることを常に念頭に置き、日々の教育活動に取り組んでいきたい。それが在外教育施設に派遣された者の重要な役割のひとつであると考えている。